

SAKURA

桜はこれまで、時代によって様々な扱われ方をされてきた。

明治期には、欧米列強の侵略と日本の海外進出によって政治的に切迫する中で、和歌に詠まれたような「日本らしさ」や「日本の伝統」が強く意識され、桜の花びらが重なり咲く様を全体主義として見立てられ、ナショナル・アイデンティティの象徴とされた。

また、昭和のはじめ戦中には、若き日本兵が故郷に住む家族や友人、恋人を守るために身を捧げ、潔く散っていったとされた。ひとはその姿を、ソメイヨシノ がぱっと咲きぱっと散る姿に重ねて、彼らの死の儚さを敬い憂いた。

終戦直前、ある画家が日本陸軍の命を受け描いた一枚の戦争画が、軍に受け取りを拒否された。敗戦後、約23年が過ぎたある日、数多ある戦争画を書籍としてひとつに収録するという話が持ち上がり、完成後一度も公開されることがなかったその絵も含まれることとなった。作者は掲載にあたり、戦後の日本社会の価値観の変化にあわせ、作品の一部を黒く塗りつぶし改作したという。

今は見ることのできない黒塗りの墨の下には、散る桜花が描かれているそうだ。

戦後、日本で全国的に植えられたソメイヨシノは、戦後復興・高度経済成長の象徴となった。今日では百円硬貨に刻まれており、震災復興のシンボルとして扱われたり、総理大臣主催の慰労会の名称にもされている。毎年春には花見客が各地で賑わい、一般にも広く愛されている。

時代によって都合良く解釈がなされてきた「桜」。それを利用したのは一体誰なのか。

私は、今まで以上に表現の自由について考えている。作品が他者に鑑賞され、自由に解釈されることは望ましい。だが、広く一般に、あるいは特定の誰かの利益のために作る作品とは。「公益性」を重視した先に失うものはあるのか。

今回は、これまでに多種多様な解釈をされながら、この日本の世相を表してきた「桜」をテーマに、これからの「表現」と「自由」について考えたいと思う。

壽山 凡太郎